

# 世界農業遺産に係る現地調査記録集

## 森・里・湖に育まれる 農業と漁業が織りなす「琵琶湖システム」



産卵のため水田に遡上するフナ(右上)と、朝もやの中で行われるエリ漁(左下)



エリ漁に関する裁定について記した 13 世紀の古文書



エリ漁の様子を描いた 19 世紀の古絵図



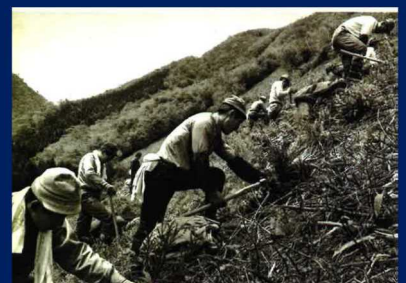
漁業者自らが多彩な漁獲対象魚を保全



現代でも人々が維持管理をする水路



水田に向かって遡上する湖魚や昆虫を捕食する鳥類



漁村を含む下流域の参画による水源林保全の取組 (19 世紀)

令和4年(2022年)6月16日 8:30~18:00  
琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会

# 目 次

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 1. 現地調査員                             | 1  |
| 2. 行程表                               | 2  |
| 3. 出席者名簿                             | 4  |
| 4. 調査概要                              | 8  |
| (1) 歓迎挨拶(今津サンブリッジホテル)                | 8  |
| (2) システムの概要説明(今津サンブリッジホテル)           | 9  |
| (3) 保全計画の説明(今津サンブリッジホテル)             | 11 |
| (4) エリ漁の説明                           | 13 |
| (5) 水源林保全の取組についての説明                  | 14 |
| (6) ヨシ帯保全、水を大切にす文化、伝統漁業についての説        | 14 |
| (7) 沖の白石についての説明(甲板にて)                | 15 |
| (8) 滋賀の食文化について説明(昼食)                 | 16 |
| (9) 沖島の地域活性化の取組について説明                | 16 |
| (10) 漁業・漁村の暮らしについての説明                | 17 |
| (11) 湖魚料理の試食と若手漁師の話                  | 18 |
| (12) 琵琶湖との繋がりに配慮した環境保全型農業(魚のゆりかご水田等) | 18 |
| (13) 琵琶湖博物館の常設展示の見学                  | 19 |
| (14) 高校生による次世代継承の取組の発表               | 20 |
| (15) 総括質疑                            | 21 |

## 1. 現地調査員（国連食糧農業機関(F A O)の審査委員)

パトリア・ブスタマンテ氏(Patricia Goulart Bustamante)



ブラジル農牧研究公社で勤務する農業者。遺伝学と植物育種の修士号と博士号を取得し、フランスの国立開発研究所で研究を行った。農場における農業生物多様性の保全について豊富な経験を有する。

ブラジルの世界農業遺産であるエスピニャソ山脈南部の伝統的なシステムにおいて農業生物多様性の保護と保全に貢献した。2016年から国連食糧農業機関(FAO)の世界農業遺産科学助言グループ(SAG)のメンバーを務めている。

## 2. 行程表

日程：令和4年(2022年)6月16日(木)

| No | 時間              | 場所(所在地)                  | 概要   |
|----|-----------------|--------------------------|--|
| ①  | 8:30~9:20       | 今津サンプリッジホテル<br>(高島市今津町)  | ・歓迎挨拶<br>・琵琶湖システムの概要説明<br>・保全計画の説明                       |
|    | (25分)           | 13Km                     | バス移動   |
| ②  | 9:45~<br>10:45  | 三和漁港<br>(高島市安曇川町)        | ・エリ漁の説明  |
|    | (25分)           | 11Km                     | バス移動   |
| ③  | 11:10~<br>12:00 | 今津港<br>(高島市今津町)          | ・高速船 megumi に乗船<br>・水源林保全の取組<br>・伝統漁業、ヨシ帯保全、水を大切にする文化の説明 |
|    | 12:00~<br>12:30 | (高速船 megumi 船内・<br>琵琶湖上) | ・滋賀の食文化について説明<br>・昼食(湖魚料理弁当)                             |
| ④  | 12:30~<br>14:00 | 沖島<br>(近江八幡市沖島)          | ・漁業・漁村の暮らしの説明<br>・湖魚料理の試食<br>・地域活性化の取組の説明                |
|    | (45分)           | 17Km                     | チャーター船移動→バス移動  |
| ⑤  | 14:45~<br>15:30 | 魚のゆりかご水田<br>(野洲市須原)      | ・魚のゆりかご水田および環境こだわり農業の説明                                  |
|    | (30分)           | 11Km                     | バス移動   |
| ⑥  | 16:00~<br>16:40 | 琵琶湖博物館<br>(草津市下物町)       | ・常設展示の説明   |
|    | 16:40~<br>18:00 | 琵琶湖博物館<br>セミナー室          | ・高校生による活動発表<br>・総括質疑                                     |





①今津サンブリッジホテル  
(歓迎挨拶・概要説明・保全計画の説明)

③今津港

②三和漁協 (エリ漁の説明)

③高速船 megumi 船内  
(水源林保全、伝統漁業、ヨシ帯保全、  
水を大切にする文化の説明・昼食)

④沖島 (地域活性化の取組の説明、  
漁業・漁村の暮らしの説明、湖魚料理  
の試食)  
近江八幡市

⑤野洲市須原 (魚のゆりかご水田、  
環境こだわり農業の説明)

⑥琵琶湖博物館  
(展示説明・高校生による発表・総括質疑)

### 3. 出席者名簿

| 所属                                      | しよく<br>職       | 氏名     |
|---|----------------|--------|
| (1) 歓迎挨拶、(2) システムの概要説明、(3) 保全計画の説明      |                |        |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(滋賀県)          | 会長<br>(滋賀県知事)  | 三日月 大造 |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(高島市)          | 幹事<br>(高島市長)   | 福井 正明  |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(滋賀県農業協同組合中央会) | 幹事長<br>(部長)    | 雲林院 智史 |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(滋賀県漁業協同組合連合会) | 副幹事長<br>(専務理事) | 澤田 宣雄  |
| (4) エリ漁の説明                              |                |        |
| 三和漁業協同組合                                | 組合長            | 齋藤 秀和  |
| (5) 水源林保全の取組についての説明                     |                |        |
| 巨木と水源の郷をまもる会                            | 代表             | 小松 明美  |
| (6) ヨシ帯保全、水を大切にす文化、伝統漁業についての説明          |                |        |
| 針江有機米生産グループ                             |                | 石津 文雄  |
| (7) 沖の白石についての説明                         |                |        |
| 滋賀県文化スポーツ部文化財保護課                        | 主幹             | 大崎 康文  |
| (8) 滋賀の食文化についての説明                       |                |        |
| 滋賀大学                                    | 名誉教授           | 堀越 昌子  |
| (9) 沖島の地域活性化の取組についての説明                  |                |        |
| 沖島町離島振興推進協議会                            |                | 本多 有美子 |
| (10) 漁業・漁村の暮らしについての説明                   |                |        |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(近江八幡市)        | 幹事<br>(近江八幡市長) | 小西 理   |
| 沖島漁業協同組合                                | 組合長            | 奥村 繁   |
| (11) 湖魚料理の試食と若手漁師の話                     |                |        |
| 沖島漁業協同組合                                | 組合員            | 塚本 千翔  |
| 湖島婦貴の会                                  | 代表             | 角田 あつ子 |

| 所属                                  | 職            | 氏名    |
|-------------------------------------|--------------|-------|
| (12)琵琶湖との繋がりに配慮した環境保全型農業(魚のゆりかご水田等) |              |       |
| 琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会<br>(野洲市)      | 幹事<br>(野洲市長) | 栢木 進  |
| 須原魚のゆりかご水田協議会                       | 会長           | 堀 彰男  |
| 須原魚のゆりかご水田協議会                       | 会員           | 八尋 由佳 |
| 滋賀銀行中主支店                            | 支店長          | 松野下 武 |
| JA レーク滋賀                            | 代理理事         | 木村 義典 |
| 滋賀県議会                               | 議員           | 井狩 辰也 |
| 国立環境研究所琵琶湖分室                        | 高度技能専門員      | 西田 一也 |
| 滋賀県立大学環境科学部                         | 大学院生         | 佐田 祐正 |
| 京都府立大学生命環境科学研究科                     | 准教授          | 中村 貴子 |
| 草津東高等学校                             |              | 藤岡 美空 |
| 大津市立志賀中学校                           |              | 黒川 琉伊 |
| (13)琵琶湖博物館の常設展示の見学                  |              |       |
| 滋賀県立琵琶湖博物館                          | 総括学芸員        | 大塚 泰介 |
| (14)高校生による次世代継承の取組発表                |              |       |
| 光泉カトリック高等学校                         |              | 太田 乃愛 |
| 滋賀県立膳所高等学校                          |              | 片岡 詩  |
| (15)総括質疑                            |              |       |
| 公益財団法人国際湖沼環境委員会                     | 副理事長         | 中村 正久 |
| 志賀町漁業協同組合                           | 組合員          | 駒井 健也 |
| 池内農園                                | 代表           | 池内 桃子 |

【オブザーバー】

| 所属               | 職  | 氏名    |
|------------------|----|-------|
| 東京大学大学院農学生命科学研究科 | 教授 | 八木 信行 |

【通訳】

| 所属                 | 職     | 氏名    |
|--------------------|-------|-------|
| 一般財団法人日本エネルギー経済研究所 | 主任研究員 | 中村 博子 |

【随行者】

| 所属                | 職           | 氏名    |
|-------------------|-------------|-------|
| 国連大学サステナビリティ高等研究所 | 客員リサーチ・フェロー | 永田 明  |
| 株式会社琵琶湖みらい研究所     | 取締役         | 山根 猛  |
| 龍谷大学社会学部          | 教授          | 脇田 健一 |

【農林水産省関係者】

| 所属  | 職               | 氏名    |
|---|-----------------|-------|
| 農林水産省農村振興局農村政策部<br>鳥獣対策・農村環境課農村環境対策室        | 室長              | 寺島 友子 |
| 農林水産省農村振興局農村政策部鳥獣対策・農村環境課<br>農村環境対策室農業遺産推進係 | 係員              | 三上 峻  |
| 近畿農政局農村振興部                                  | 地方参事官<br>(事業計画) | 前田 仁  |
| 近畿農政局農村振興部農村環境課                             | 課長              | 杉山 正広 |

【県関係者】

| 所属          | 職  | 氏名     |
|-------------|----|--------|
| 滋賀県農政水産部    | 部長 | 宇野 良彦  |
| 滋賀県農政水産部    | 次長 | 中田 佳恵  |
| 滋賀県農政水産部    | 技監 | 平井 喜与治 |
| 滋賀県農政水産部    | 技監 | 二宮 浩司  |
| 滋賀県農政水産部    | 技監 | 中川 義雄  |
| 滋賀県農政水産部農政課 | 課長 | 小川 一記  |
| 滋賀県農政水産部農政課 | 主幹 | 有田 高志  |
| 滋賀県農政水産部水産課 | 課長 | 山田 源太  |



| 所属                          | 職   | 氏名    |
|-----------------------------|-----|-------|
| 滋賀県農政水産部農村振興課               | 課長  | 田中 茂穂 |
| 滋賀県農政水産部農村振興課地域資源活用推進室      | 室長  | 竹山 徹  |
| 滋賀県農政水産部農業技術振興センター<br>栽培研究部 | 部長  | 日野 耕作 |
| 滋賀県琵琶湖環境部森林政策課              | 技監  | 廣瀬 正明 |
| 滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課            | 課長  | 矢野 克典 |
| 滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課            | 副主幹 | 中井 克樹 |
| 滋賀県商工観光労働部ここ滋賀              | 所長  | 青田 朋恵 |
| 滋賀県総合政策部企画調整課               | 参事  | 伊崎 直人 |

## 4. 調査概要

### (1) 歓迎挨拶（今津サンブリッジホテル）

#### ○高島市 福井正明市長

（挨拶概要）

高島市長の福井でございます。ようこそ高島市へお越しくださいました。御覧のとおりこの会場からは見渡す限りの琵琶湖が展望できますが、この日本一の琵琶湖を中心とした農業、水産業の「世界農業遺産」登録に向けた現地調査が、この高島市を皮切りに開催されますことを、心から嬉しく思います。パトリシア・ブスタマンテ様、八木信行様、改めましてようこそお越しくださいました。

さて、この琵琶湖は今から 400 万年前に誕生したと言われております。県民にとって琵琶湖は特別な存在です。ここ高島市は、琵琶湖の水の3分の1はこの高島市から流れ注いでいると言われております。また、この琵琶湖の水は京阪神の 1,450 万人の生活用水として利用されています。この地で暮らす我々にとって琵琶湖との共存共生はまさに生活そのものであり、そこから生まれた産業は一体となったもので、かけがえのないものです。

本日御覧いただく「琵琶湖システム」は、森林や水田営農に支えられながら発展してきた琵琶湖の伝統的な内水面漁業を中心に、人と多様な生きものが共生するもので、世界農業遺産として相応しいものと考えており、私たちは認定を心待ちにしております。

限られた時間の中ではございますが、ブスタマンテ様にとって有意義な一日となりますよう、御願い申しあげまして、歓迎の挨拶とさせていただきます。



高島市 福井正明市長から歓迎挨拶

#### ○滋賀県 三日月大造知事

（挨拶概要）

おはようございます。ようこそ滋賀県、琵琶湖地域にお越しくださいました。滋賀県知事の三日月大造です。

私たちは日本で一番大きな湖、琵琶湖をお預かりしております。この琵琶湖の水を私たち滋賀県民のみならず、京阪神の 1,450 万人の方々が毎日飲み、使っていらっしゃいます。従いまして、私たちは、この琵琶湖の水をできる限り綺麗な状態で、水を使い、流すことを心掛けて生活しています。農業も工業もそうです。持続可能な状態でこの琵琶湖システムを保つことに心を注いでおります。今日は1日、そうした私たちの水とかわる生き方について御覧にいただけると幸いです。

私たちのシステムを端的に表現しますと、“淡水域における持続的な資源利用のモデル”として発信していきたいと思っております。



滋賀県 三日月大造知事から歓迎挨拶

このシステムは人間のみならず、例えば魚類、様々な生き物、鳥や虫たちにとっても持続可能なものでありたいと思っております。そして、こうした生き方は、千年以上前から私たちの先祖が伝えてきてくれた生き方でもあります。私たちはこのことを誇りに思うと同時に次の世代に確実に引き継いで参りたいと思っております。こうした生き方や食べ物の作り方は、言うまでもなく SDGs の理念と重なるものです。

私たちが得た教訓を、淡水資源の保全に課題を有する国々でもしっかりと伝えていきたいと思っております。その意味で琵琶湖地域が、「世界農業遺産」の地として発信できることを心から願っております。

本日の審査を機に様々な御助言をいただきましたら幸いです。御視察が有意義なものとなりますよう御祈念申し上げて、歓迎の御挨拶とさせていただきます。

## (2) システムの概要説明（今津サンプリッジホテル）

「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」の会長として、三日月知事から「琵琶湖システム」の概要についてパワーポイントにより説明を行いました。



滋賀県 三日月大造知事から「琵琶湖システム」の概要についての説明

### ○主な内容

- ・琵琶湖システムは、水田営農と深く関わりながら発展してきた伝統的な内水面漁業を中心とするシステムで、「淡水域における持続可能な資源利用の世界的なモデル」とも言えるものです。
- ・根幹には、産卵にやってくる湖魚に安全な繁殖場を提供する水田営農、必要な量・サイズの湖魚のみを選択的に漁獲する伝統的な漁法、漁業者が組織的に水産資源を保全管理する伝統的で社会的な仕組みがあります。



伝統的な琵琶湖漁業 エリ漁

・水田にやってくる湖魚を捕獲する様々な待ち受け型の漁法を発達させ、食料自給の安定性を高める半農半漁のライフスタイルを築きました。こうした中で、発達した漁法のひとつが、未成熟魚を捕らえない、選択的な漁獲が可能なエリ漁です。



滋賀県の郷土料理 フナズシ

・これは水流や魚の生態を巧みに利用する伝統的な定置網で、持続的な資源の利用と保全を実現するランドスケープ・レイクスケープを形作っています。

・これらの営みは、人びとの絆を醸成し、自然災害等の困難に協力して対処する上で精神文化的基盤となってきたものです。

・「水に神が宿る」との伝承や、生きものに対する畏怖や感謝の念を呼び起こすことにつながり、魚に感謝する儀式や魚を献上する儀式も継承されています

・科学助言グループの皆さんにもご心配いただいている近年の外来魚問題に関しては、特にオオクチバスとブルーギルが激増して在来魚に深刻な被害を及ぼしています。これについても、漁業者と釣り人が連携して駆除を強力に進めています。

・回収された外来魚の有効活用も進めており、外来魚のコロツケを開発した漁業協同組合や、外来魚の天ぷらを提供するレストランもあります。

・こうした多様な主体の協働は、ソーシャル・キャピタルの形成にもつながり、それが、下流の大都市圏の住民を含む 1,450 万人の水源である琵琶湖の水質や生態系の保全にも寄与しています。

・我々の地域では、琵琶湖景観形成特別地区を設けており、そこでは湖岸に家や看板を立てることができません。このように琵琶湖岸の景観の保全に努めており、琵琶湖の周辺には非常に美しい風景が広がっています。

・当地域は、さらに、地球上の水の 0.5%以下と言われる利用可能な淡水資源の保全に向け、学術研究を進めるとともに、国際会議の開催や、海外からの研修受け入れ等を行っています。湖が結ぶご縁で、ブラジルのリオ・グランデ・ド・スール州とも、姉妹提携を結んでいます。これらの努力は、まさに、経済、社会、環境の調和を目指す取組で、琵琶湖システムの持続可能性を高めるものであり、伝統的で持続的な営みにより生き物と共生する、このシステムの価値の伝承と共有にもつながっています。



「琵琶湖システム」の特徴



・琵琶湖地域の大きな特徴、それは住民参加の気運が高いことです。ボランティア活動の行動者率は、全国1位。また、村落共同体においては綿密なコミュニケーションが図られ、その寄り合いの頻度も日本一です。人々の絆が強いこの地域で140万人もの人々が心をつなげて環境保全に取り組み、貴重な財産を未来に引き継ごうとしています。



ボランティア活動の行動者率は全国1位

・本日、ぜひこのシステムを担う大勢の人々との交流を楽しんでください。ブスタマンテ委員にとって、この琵琶湖システムを見て、感じて、味わい、楽しんでいただける充実した一日になるものと信じています。ありがとうございます。

### (3) 保全計画の説明（今津サンブリッジホテル）

琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」幹事長、滋賀県農業協同組合中央会 雲林院智史部長から、保全計画についてパワーポイントにより説明を行いました。



琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」幹事長、滋賀県農業協同組合中央会 雲林院智史部長より保全計画の説明

#### ○主な内容

・アクションプランの内容は、脅威と課題、対応策、今後の見込み、我々の使命と責任です。

・まず脅威と課題です。本システムにおける脅威は主に4つ、①湖魚の産卵・成育環境の変化、②担い手の減少、③食文化の衰退、④社会組織の弱体化です。これまでに当地域が直面した脅威は、1970年代の淡水赤潮、1990年代以降の外来有害生物(魚、鳥、草)の拡大、そして近年は温暖化の問題です。



脅威と課題について

①湖魚の産卵・成育環境の変化、②担い手の減少、③食文化の衰退、④社会組織の弱体化

・第2の脅威が漁業や農業の担い手の減少です。第3の脅威が食文化の衰退です。とりわけ湖魚の消費量が減ってきていることが問題です。第4の脅威が社会組織の弱体化です。以前に比べて人と人とのつながりが弱くなっているのではないかと思われるデータが示されています。

・次に、これらの脅威に対する対応策を述べます。持続性を高める対応策はこちらの4つの柱からなっています。まずは、水産資源の保全管理と水質生態系の保全です。次に担い手の確保と育成、それから、食文化の継承、そして協働の促進と国際的な連携です。水産資源の保全管理につきましては、水産資源の適切な保全・管理として、資源管理型漁業、種苗放流、調査研究等を行っており、今後もこれに取り組んでいきます。

#### Four pillars to enhance sustainability



脅威に対する対応策について

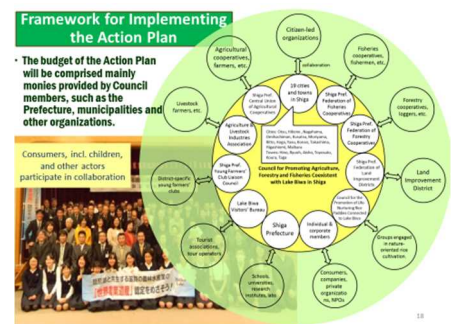
・水質保全に向けた主な取組としては、「環境こだわり農産物」の生産拡大と深化等、ヨシ帯の保全活動推進やヨシ活用、水源林の保全に取り組んでいきます。

・生態系保全に向けた主な取組としては、外来魚・カワウ・水草対策等の水産有害生物の駆除の促進、「魚のゆりかご水田」やヨシ帯などの魚の産卵環境の保全、多様な主体による生物多様性の保全再生活動の推進に取り組みます。

・気候変動に対しては、琵琶湖環境の研究や 2050 年までに地域の二酸化炭素排出量を実質ゼロにすることを目指した CO2 ネットゼロの取組を進めます。

・新たな担い手の確保・育成に係る主な取組としては、漁業従事者等の育成や農業体験等、伝統的な知識の未来への継承を引き続き行っていきます。社会組織の弱体化に対しては、地域の協働の推進や国際協力を進めてまいります。

・アクションプランは、「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」が中心となって推進します、この協議会には琵琶湖地域すべての自治体と、農林漁業者団体、関係団体、大学・研究機関、企業、住民、消費者などが参加しています。



「琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会」について

・アクションプランの実施に係る予算は、県、市町、団体をはじめとする当協議会の構成員による財政支援を中心としながら、必要な国の支援も得ていくこととしています。これまでの成果として、ニゴロブナとホンモロコの漁獲量が近年回復傾向にあります。

・期待される成果と将来の見通しです。多様な主体の参画の増加、水質および生態系保全によるバランスの取れた水産業と漁業、琵琶湖システムの価値の発信と国際協力により、生産者、消費者、子ども、生き物、琵琶湖、世界の内水面漁業の6者にとってメリットのある「6方よし」の環境が整うと思われます。

・近代化に加え、漁業資源への需要増と乱獲等により、資源枯渇の危機が迫っているところです。こうした危機に直面する世界の内水面漁業の持続可能性の向上のために琵琶湖システムにおける努力と経験と発信は、大いに貢献できます。

・我々は、「琵琶湖システム」の価値の発信、環境配慮型の農水産業の実践、そして世界中の主体との協働により「琵琶湖システム」を未来に引き継いでいきます。

#### Expected outcomes: Future prospects

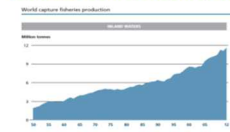
- ① Increased participation by various actors
- ② Balanced achievement of both inland fisheries and agriculture through water quality and ecosystem conservation
- ③ Communicating the value of lake-to-land-focused practices and further global partnerships



「6方よし」の環境整備

#### Inland Fisheries around the World

Inland fisheries play an important role in providing food and employment, and in supporting culture throughout the world. However, amid rapid population growth and urbanization, the demand for inland fisheries and the environmental burden attributable to the agricultural sector are increasing, particularly in Asia and Africa, thus posing a risk of freshwater resource depletion. FAO is concerned about threats to the sustainability of inland fisheries around the world.



World Capture Fisheries Production (Inland Waters) (The State of World Fisheries and Aquaculture, FAO, 2014)

世界の内水面漁業の持続可能性の向上に向け

## (4) エリ漁の説明

三和漁港(高島市安曇川町)に向かうバス車内では、琵琶湖の伝統的漁法の代表格であるエリ漁について映像などを使って説明を行いました。

その後、実際に漁船に乗船し、エリの近くまで近づいて、三和漁業協同組合 斎藤秀和組合長から、具体的な漁獲方法等について説明を行いました。下船後には、漁協事務所にてセリなどについて説明を行い、調査員は、湖魚料理店等に引き渡される流れなどについて熱心に質問されていました。

### ○主な説明内容

- ・三和漁業協同組合の組合員数は25名で、斎藤組合長は23歳の時から31年間エリ漁に携わっています。
- ・エリ漁は、魚の習性を利用した漁法で、網を張って作ったツボと呼ばれる部屋に、魚が迷い込むのを待って捕獲する待ち受け型の漁法です。
- ・ツボまで誘導された魚も、そこで生き、再び入り口を通して外に出ることが可能です。また、網目のサイズにより、小さな未成熟魚を捕獲の対象から除外することができます。
- ・漁業協同組合が、エリの管理母体となって県から免許を受け、共同漁業権に基づき、その組合員が漁獲を行っています。



漁船に乗船し実際にエリを見ながらの説明



漁協でのセリについての説明

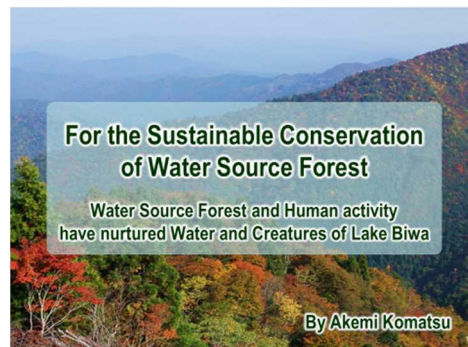


## (5) 水源林保全の取組についての説明

今津港(高島市今津町)に移動し、高速船「megumi」に乗船しました。船内では、まず、巨木と水源の郷をまもる会 小松明美代表から、水源の森の持続的な保全に向けて、琵琶湖の水と生き物を育んできている水源の森と人々の営みについての説明を行いました。

### ○主な説明内容

- ・琵琶湖を取り巻く四方の山々から400本もの大小の河川が琵琶湖に流れ込んでいます。その一本一本の川の健やかさが、琵琶湖の水質に大きく影響しており、その川が健康であるためには、水源となる森林が健やかでなければなりません。
- ・広葉樹の深く広く張った根を落ち葉の保水力が河川の水量と水質を安定させ、そのことが湖魚を含む生物多様の保全に大きく寄与しています。
- ・巨木の伐採は、やがてこの森の保水力を奪い、災害などを引き起こすことに繋がります。また、食文化の衰退にも繋がります。そのことを危惧した地元の人達と共に「巨木と水源の郷を守る会」を結成し、これ以上の伐採が起こらない手立てを施し、伐採業者と森林所有者の間で保全林として次世代に引き継いでいくための仕組みをつくることができました。



巨木と水源の郷をまもる会 小松明美代表から、水源の森の持続的な保全活動についての説明

## (6) ヨシ帯保全、水を大切にす文化、伝統漁業についての説明

針江有機米生産グループ 石津文雄氏から、カバタでの水を大切にする文化や半農半漁の自然に負荷をかけない持続可能な漁業と農業などについての説明を行いました。

### ○主な説明内容

- ・針江地区においては、カバタでは洗剤を使用しないという暗黙のルールがあります。洗剤は化学物質を含んでいるため水に負荷を及ぼすからです。
- ・カバタは、地下10メートルから24メートルの範囲内に鉄パイプを打ち込めば、水がひとりで湧いてきます。川とつながっており、壺池からあふれた水と一緒に川に水が流れ出て行って川に戻ります。端池には黒い大きな鯉が飼われていて、家の中で出た残飯を鯉が食べてくれます。汚れた水を流さない仕組みになっています。
- ・琵琶湖岸のヨシ原の保全活動では、12月の第1週の日曜日にヨシ刈りと刈ったヨシを丸建てにしています。2月から3月にかけては、刈り取った草を燃やすヨシ焼を行います。燃やすことにより新しい新芽を見ることができます。4月後半にはノウルシが満開となる様子を見ることができます。



- ・また、「オカズトリ」という自分の食べただけの魚を獲る形の漁を行っています。農作業の合間に行うもので半農半漁と呼ばれるものです。モンドリという網を使って魚を獲っています。
- ・農業と漁業を半農半漁という形で自然に負荷をかけない農業と持続可能な漁、そして琵琶湖に負荷をかけないよう清掃活動に取り組んでいます。
- ・琵琶湖を汚さず下流府県の飲み水として、琵琶湖に負荷をかけないという精神で活動しています。



針江有機米生産グループ 石津文雄氏から、水を大切にする文化や半農半漁の自然に負荷をかけない持続可能な漁業と農業に

## (7) 沖の白石についての説明（甲板にて）

琵琶湖のほぼ真ん中「沖の白石」付近に到着したところで、甲板に出迎えていただき、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課の大崎 康文氏から、沖の白石の説明を行い、森・里・湖に囲まれた素晴らしい景観を御覧いただきました。

### ○主な説明内容

- ・東西の対岸からは5km以上離れており、見渡す限りの水の世界です。その水量の膨大さを体感いただけることと思います。西には比良山系、東北に伊吹山、東には鈴鹿山系を望むことができます。
- ・こちらの岩は「沖の白石」と呼ばれるものです。大小4つの岩で構成されています。一番大きな岩は大岩と呼ばれます。大岩は、水面からは14mの高さしかありませんが、湖底から測ると高さ85mにもなる非常にダイナミックな地形の先端部分です。
- ・琵琶湖にポツンと浮かぶ岩々は、よく目立つので湖上交通の目印になっています。伝説では、東近江市の石塔寺の石製三重塔と同じく空から降ってきたが、沖の白石は逆さになったもの、というものがあります。岩石の本来の色は灰色ですが白く見えるのは湖上で休憩する鳥のフンがついているからです。



「沖の白石」についての説明

## (8) 滋賀の食文化について説明（昼食）

昼食を取りながら、滋賀大学 堀越昌子名誉教授から、滋賀の食文化についての説明を行いました。昼食は、高島市マキノ町の天明四年(1784年)創業の「ふなずし」の老舗店 魚治(うおじ)の湖魚弁当とふなずしを味わっていただきました。

### ○主な説明内容

- ・琵琶湖地域には、琵琶湖を中心に形成された滋賀らしい食文化があります。長浜市で行ったある調査の結果では、農村でも昔から琵琶湖の魚を多く食べていました。
- ・「フナズシ」などの「ナレズシ」を漬けている地域も琵琶湖に近い地域だけでなく、滋賀県全域で漬けていたことがわかっています。「すし切り神事」と呼ばれる神様に「ふなずし」を捧げるお祭りも残っています。
- ・また、「ナレズシ」は、「ニゴロブナ」だけでなく「アユズシ」や「ウグイズシ」など多様な湖魚を使った「なれずし」があります。
- ・厚生労働省の調査では、滋賀県の男性の平均寿命は日本一です。これは、古くから伝わるバランスの取れた健康的な食事スタイルが大きく寄与しているとも考えています。



滋賀大学 堀越昌子名誉教授から滋賀の食文化についての説明



「フナズシ」の老舗店 魚治の湖魚弁当

### ○魚治七代目 左寄謙祐 氏よりお弁当に添えられたメッセージ

このたびは琵琶湖地域にお越しいただきありがとうございます。

私の家は天明4年(1784年)から海津の地で鮎寿しを作り続けています。

鮎寿しは人が作り出した自然である水田と、ゆりかごのようなその水田を産卵場所に選んだ鮎が生み出した食べ物です。鮎と人間が一つの循環の中に身を置き、お互いがバランスをとりながら重ねてきた鮎寿しの歴史は千年を超えるといわれ、ハレの日の食べ物や保存食として家庭や地域固有の食文化を作り上げてきました。

長い時間をかけて形作られた食文化は一方通行の恵みでは成り立たず、私たちが自然の循環の一部となるのが大切だと教えてくれています。

このような人と自然が一つになり積み重ねてきた循環の生活が価値あるものとして広く認知され、このバランスをこの先も持続し続けるために「世界農業遺産」に認定されることを、この循環に身を置く一人として心から期待しております。

私たちが関わってきた琵琶湖の恵みとその食文化をお伝えできればと思い今回のお弁当を作らせていただきました。

森・里・湖に育まれた食文化を楽しんでいただければ幸いです。

## (9) 沖島の地域活性化の取組について説明

沖島小学校の全児童の歓迎のもと、日本で唯一人が暮らしている湖上の島「沖島(近江八幡市沖島町)」に上陸し、沖島町離島振興推進協議会 本多有美子氏から、自然と伝統を守りつつ観光や地域活性化など、沖島振興の事業について説明を受けながら、島内を散策しました。

### ○主な説明内容

- ・ 沖島小学校には、約 10 名の生徒が在籍しており、豊かな自然や文化と触れ合う体験のほか、隣接するデイサービスとの交流事業などを行っています。
- ・ 島のメインストリート「ホンミチ」<sup>\*</sup>には、狭い路地に家々が並び、島独特の街なみが見られます。
- ・ 離島振興の一環として、新しい入居者を募集して空き家をなくす取組などを行っています。
- ・ 夏には、沖島でスキューバダイビングを楽しむ体験ツアーも実施されています。



沖島小学校の児童による出迎え



沖島町離島振興推進協議会 本多有美子氏から島内を巡りながら地域活性化の取組についての説明

※ホンミチ:水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選ばれています。

## (10) 漁業・漁村の暮らしについての説明

沖島漁業協同組合 奥村繁組合長から、琵琶湖漁業の中心的な役割を担う沖島漁業について、エリ漁を中心に刺し網などの漁法の説明などを行いました。

### ○主な説明内容

- ・ 沖島漁協の組合員数は現在 71 名で、琵琶湖の漁協では最大の人数です。かつては約 150 名が在籍していました。
- ・ 今はコアユの刺し網漁の最盛期です。漁船に高く組まれた足場に網を掛け、その網を振って魚を落として漁獲します。夫婦で一緒に営むことが多い漁法です。
- ・ スジエビは「たつべ」というかごを使って漁獲します。昔は竹を使って手作りでかごを制作していましたが、今はプラスチック製に変わってきています。冬場の琵琶湖の深いところにいるエビは柔らかくて食べやすいです。
- ・ 8月からは沖曳き網漁が始まります。これはワカサギなどが大量にとれる漁法です。



沖島漁業協同組合 奥村繁組合長から、沖島漁業についての説明



## (11) 湖魚料理の試食と若手漁師の話

沖島漁協の婦人部が運営されている「湖島婦貴の会」の皆様から沖島の家庭料理を振舞っていただきました。ビワマスの刺身や塩焼き、ホンモロコの酢漬けやコアユの佃煮、最近開発した「エビ豆コロッケ」のほか、協議会会長の三日月知事のお手製のフナズシなどを現地調査員に召し上がっていただきました。

また、沖島漁業協同組合の塚本千翔氏から、これからの沖島での琵琶湖漁業や世界農業遺産認定への期待について話していただきました。

### ○主な説明内容(塚本千翔氏)

- ・ 沖島漁協で奥村繁組合長のもとで漁師になるための研修を積んでいます。
- ・ 近江八幡市の出身であり、もともと沖島が好きでした。いろいろな人から沖島の漁業や湖魚料理の話聞き、美味しい湖魚がたくさんあることに感動して、約4年前からここに通っています。
- ・ 今は民泊の管理もしていて、週のほとんどを沖島で暮らしています。



湖島婦貴の会の皆様による沖島の家庭料理の振舞い



現地調査員と湖島婦貴の会の皆様

## (12) 琵琶湖との繋がりに配慮した環境保全型農業（魚のゆりかご水田等）

野洲市須原に移動し、「魚のゆりかご水田」を見学していただきました。野洲市須原自治会をはじめとする大勢のみなさんが出迎えていただきました。

到着後すぐに、地元でつくった麦茶と大麦の**麦稈**ストローがプレゼントされ、プラスチックを減らす取組の説明を行いました。続いて、須原せせらぎの郷 堀彰男代表からの「魚のゆりかご水田」についての説明を行い、実際に水路から稚魚を網ですくって稚魚の生態を見ていただきました。

### ○主な説明内容

- ・ 県内の「魚のゆりかご水田」を代表して、説明を行います。この時期は、よく雨が降ります。琵琶湖の魚には、固有の生態を持つものがたくさんいます。その中で、コイ、フナ、ナマズなどは、産卵期に雨が降って水位が上昇すると、湖からやってきて、水路を遡上して田んぼをめざします。
- ・ 写真は、水路を上っているニゴロブナです。ニゴロブナは、固有種であり、琵琶湖漁業の重要な魚です。私たちにとって、歴史的に重要なタンパク源であり、今でも水路に魚を捕りにくる人もいます。



大麦の麦稈(ばっかん)ストローの贈呈



- ・餌が豊富な一方、フナを食べてしまう外来魚は入ってこないで、高い生残率で、大きくなるまで育つことができます。魚たちは、水田が安全なことを、知っているかのように。人が米を作る場所が、同時に魚にとって何より大切な産卵場所になっています。それが、漁業資源になります。これこそ、琵琶湖システムの中心です。
- ・また、単に、魚を育てる取組だけでなく、こうしたことをたくさんの方に知ってもらう必要があると考えおり、田植体験、生きもの観察会、収穫体験、収穫への感謝の勉強会を開催しています。
- ・このように、私たちは、琵琶湖と生き物に配慮した農業を、未来へ届けていきます。ここには、外国からの研修生も数多く受け入れています。世界農業遺産の認定をいただき、その価値を、皆さんに伝えていきたいと考えています。



須原せせらぎの郷 堀彰男代表からの「魚のゆりかご水田」についての説明を行ったのち、実際に水路から稚魚を網ですくいました。

### (13) 琵琶湖博物館の常設展示の見学

琵琶湖博物館(草津市下物町)では、琵琶湖博物館の高橋啓一館長や大津市の中学生 嘉田さくらさん(京都新聞社小・中学生新聞コンクールにて「琵琶湖システム新聞」が滋賀県知事賞を受賞)をはじめとする多様な職種、世代の方々に出迎えていただきました。暮らしと自然の結びつきを「琵琶湖」「ヨシ帯」「田んぼ」「森と川」の景観の読み解きとして提示しているC展示室を琵琶湖博物館総括学芸員の大塚 泰介氏の説明のもと、御覧いただきました。

#### ○主な説明内容

- ・日本の水田とその周辺には、これまで分かっているだけで6千種を優に超える生物がいます。琵琶湖博物館では、そのリストをデータベース化して公開しています。水田は人の手で管理され、1年サイクルで湛水と落水がくり返されます。田んぼに水が入ると、田んぼの土の中などで休眠していた生物が一斉に活動を始め、また多くの生き物が待ち構えていたかのように田んぼにやって来て繁殖します。この地域における1年間の気象サイクルと整合した、生物にとって予測可能な環境変動が、水田に多種多様な生物が生息できる大きな要因になっていると思います。
- ・壁に描かれたコラージュ画像(右写真)は、琵琶湖集水域の田んぼの春夏秋冬を示していますが、ここに出てくる生物は全て琵琶湖集水域の田んぼとその周辺で普通に見られるものです。琵琶湖集水域の田んぼには、現在、田んぼとその周辺でしか見られない生物も生息しています。その代表格が、ここにいるナゴヤダルマガエルとハッタミミズです。いずれも日本の固有種で、また日本の中でも分布域が限られています。最近の研究で、ハッタミミズは琵琶湖集水域で進化したらしいことが分かってきました。ナゴヤダルマガエル、ハッタミミズとも、もともとは後背湿地に生息していたようです。そして人間が後背湿地を水田に開発した結果、生息場所を水田に移してき



琵琶湖集水域の田んぼの春夏秋冬を表す壁画

たようです。つまり人間が築いた水田そのものが、開発前の後背湿地の代替生息場所になっているということです。

- ・琵琶湖も世界の多くの湖沼と同様、近代の人間活動の増大により、環境の危機を経験しました。琵琶湖の水質が悪化して赤潮やアオコが出るようになりました。また湖岸の人々の生活を守るために建設された湖岸堤や、農地の生産性を高めるための用排水路の整備は、田んぼに魚が入りにくい状況をつくりだし、魚の産卵の場を減少させました。



「琵琶湖システム」を表すジオラマを用いての説明

- ・しかし、1980年「富栄養化防止条例」の施行により、琵琶湖南湖のリンの濃度は下がり始めました。対策が難しいと言われていた窒素の濃度も、今世紀に入って減農薬・減化学肥料の「環境こだわり農業」が県内で広まるにつれて、琵琶湖全体で下がり始めました。こうして琵琶湖の水質は、リン、窒素など多くの指標で、定期観測が始まった50年前と同程度か、それよりも良い水準に戻ってきています。
- ・魚が繁殖できる田んぼが少なくなったことも、「魚のゆりかご水田」の取り組みが広まり、昔の様子を取り戻してきています。また、ニゴロブナの漁獲量も、近年では回復の傾向が見られます。
- ・このような「琵琶湖システム」のレジリエンスは、この地域の社会が持つ豊かな社会関係資本によるところが大きいと思います。地域の結束が強い一方、排他的ではないので異なるアクターどうしの協力もしやすいのです。その背後には琵琶湖の存在があります。皆が琵琶湖に関心を持ち、また琵琶湖に育まれてきたという意識が多くの人にあるので、琵琶湖のためならばよい協働ができるのです。琵琶湖システムのレジリエンスは、まさに琵琶湖と人々の相互作用によって支えられていると考えます。

## (14) 高校生による次世代継承の取組の発表

草津市立渋川小学校の卒業生の太田乃愛さんと片岡詩さんの高校生2人が、「世界農業遺産」学習や「琵琶湖システム」の次世代継承の取組についての発表を行いました。

### ○主な発表内容

- ・小学校時代において、食べ物を生産する大勢の方から直接話を聞き、琵琶湖の船上学習「うみのこ」で寝泊まりするなどして、琵琶湖と生物多様性の重要性を学んできました。小学校を卒業後も、様々な活動を行ってきましたので、その内容について報告します。
- ・小学校5年生の時には、滋賀の郷土料理について学習し、多くの人と出会いながら、琵琶湖地域の郷土料理をつくり、企業の方々など多くの方々に味わっていただき発信してきました。
- ・6年生では、郷土料理の食材を生み出す滋賀の農林水産業について学習をします。琵琶湖システムを構成する農業、漁業、水源林の取組などを学び、その成果を自分たちの活動につなげていきます。
- ・毎年、私たちの小学校では、琵琶湖地域の農林水産業について学び、その魅力を県内外に発信する活動を続けてきました。他の GIAHS 地域の方々とも、意見交換や交流を深めてきました。こう



草津市立渋川小学校の卒業生2名による取組発表

した食や体験を通じて、「知る」ことから、「考え」、そして「行動する」、伝えていきたいと思うようになりました。

- ・中学生になっても、その気持ちは変わりません。学校が休みの時には、琵琶湖の漁師さんと一緒に活動しました。漁師さんの指導のもと、「ふなずし」を漬け始めました。漁師さんからは、琵琶湖のこと、琵琶湖漁業のことも直接教えてもらいました。出来上がった「ふなずし」を農業遺産シンポジウムで参加者の方々にふるまいました。
- ・琵琶湖地域では、古来から伝わる「近江のお茶」の栽培を行っています。農薬や化学肥料も全く使っていません。琵琶湖地域の協議会会長の三日月知事とともに、茶摘み作業のお手伝いに参加しました。
- ・私たちは、こうした様々な食や農業、水産業の体験を通じて、地域の未来のため、この琵琶湖システムを将来に受け継ぎたいと強く思うようになりました。しかし、私たちは高校生にすぎません。それでも、出来ることがあります。地域の人たちに「琵琶湖システムの価値を伝え、食べてこのシステムを応援すること」です。
- ・これからは、世界の国々と、GIAHS の価値を学び、共有したいと願っています。私たちは、世界の GIAHS 地域について学び、よりよい世界をつくるために連携していけるよう、将来を担う私たちが、この「琵琶湖システム」をしっかりと受け継ぎ、次世代につなげてまいりたいと思います。

## (15) 総括質疑

総括質疑では、現地調査員からの様々な質問に対応した後、若手漁業と農業者の方から後継者としてのビジョンや思いを伝えていただき、「琵琶湖システム」の持続可能性を PR しました。

### ○主な発表内容

志賀町漁業協同組合 組合員 駒井 健也氏

- ・親方から漁を引き継いだものの漁獲量や漁業者が減ってきているという問題が直面しています。ただ、新しい考え方でエリ漁などの琵琶湖漁業を持続していけるようシステムを考えていきたいと思っています。例えば、魚を取るだけでなく、消費者に届けるところまでを漁業者がきちんと考えたり、漁業だけでなく、農業や観光業などいろんな産業の方々との協働も考えていきたいと思っています。
- ・私自身、独立して2年目で、まだいろいろな方に助けていただいています。漁師をやりたいと声を掛けてくれる後輩ができ、指導する立場にもなりました。少しずつ前に進めているという実感があるので、持続的な取組となるよう今後もすすめていきたいと思っています。

池内農園 代表 池内 桃子氏

- ・東近江市で農薬・肥料を一切使わない自然農法に取り組んでいます。母からお米作りを引き継ぎました。日々の作業で感じることは、周りの農家さんが高齢化していることです。農業が魅力的なものだということを若い人に向けて発信することが自分の使命だと思って活動しています。
- ・農薬・肥料を使わないとお米は育たないと思われがちですが、未来を考えた時に、本当にこれでいいのかという思いから自然農法を始めました。
- ・滋賀農業女子100人プロジェクトを数年前に立ち上げました。農業といえば滋賀県と思ってもらえるように頑張っていきたいと思



若手漁業者と農業者による発表

っています。